景観調和建築物研究グループ第３班
番外編～勝沼家ものがたり～

○勝沼家物語
　登場人物紹介
　（東京）
勝沼　太郎　（夫）　37歳　大手総合商社勤務
　　勝沼　花子　（妻）　33歳　専業主婦
　　勝沼　一郎　（長男）　6歳　幼児（学習院幼稚園年長）
　　勝沼　房子　（長女）　3歳　幼児
　（山梨）
　　勝沼　寅男　（祖父）　72歳　農家（先祖代々の土地を守る頑固親父）
　　勝沼　朝子　（祖母）　72歳　農家（寅男を支える賢母であるが病弱）

　太郎一家は東京都渋谷区在住。太郎は青山学院大学卒業後に大手商社へ就職し、現在19年目で20名以上の部下を抱える中堅エース的存在。花子は生まれも育ちも田園調布、学習院大学卒業後にアパレルメーカーの総合職として働いていたが、太郎との結婚を機に退職。現在は長男一郎・長女房子の2人の子宝にも恵まれ、誰もが羨む順風満帆な生活を送っていた。

そんなある日...太郎の母の朝子が病に倒れたとの連絡が入った。元々病弱で喘息持ちの朝子であったが、70歳を過ぎた頃から特に具合が優れない様子であった。病名は、「慢性心不全」。寅男と共に農業を続けてきた朝子であったが、医師からの絶対安静の指示を受け、家の中の家事をすることしか出来なくなってしまった。寅男は1町弱の農地を一人で耕作しなければならないことに不安を感じていたが、決して弱音を吐くことなく、また、太郎に助けを求めることもなかった。

そんな両親の様子に太郎は、勝沼家の長男として母親の面倒及び先祖代々続く農地を守っていくことを決心する。しかし、都会育ちで現在の生活に満足している花子が、現在の生活を捨て、田舎に引越すということを簡単に了承するとは思えなかった。そこで太郎は、少しでも田舎の良さを花子に伝える為に、甲州市で行われる多くのイベントに暇を見つけては家族で参加するようになっていった。

かつぬま朝市、川あるき、ぶどう祭り、ワインツーリズム、ひな飾りと桃の花まつり、上条集落の視察等、1年を通じ多くのイベントが有る甲州市。数々のイベントに参加した花子は、徐々に田舎の生活に興味を持ち始めていった。また、子供たちが自然の中で目を輝かせながら遊ぶ姿も花子の田舎への思いを一層強くさせていった。

　太郎は花子と子供たちの変化を嬉しく見守っていた。また、自身の移住後の仕事探しも進めていた。産業の少ない山梨で安定した職を見つけることは困難であったが、農業と平行して出来る仕事。また、自身の商社マンとしての経験を生かせる仕事をしようと考え、個人生産果物の海外販売と甲州ワインの国際販路の確保に取り組み始めた。

　一方で勝沼家には移住を考える際にもう1つ大きな問題があった。それは、生活の拠点となる家。太郎の生家は勝沼宿にある歴史ある古民家で、築150年を越えていた。太郎は花子と子供たちのことを考え、この古民家を潰し、寅男・朝子とは完全分離型の2世帯住宅の建築を花子に提案してみようと考えていた。

　朝子が病に倒れてから8ヶ月。太郎は花子に初めて面と向かい移住のお願いをした。そして、移住の条件として新しい仕事の確保と完全分離型の2世帯住宅の新築を考えていることも伝えた。すると花子から思いもよらない答えが返ってきた。
「山梨にいる時の子供たちの生き生きした姿を見ていると、今の英才教育よりも自然の中での子育ての方が子供たちの為になると思う。だって、こんなに笑う2人を今まで見たことがなかった」それに「私は勝沼家の長男に嫁いだのだから、勝沼家に入りお義母さん・お義父さんの面倒も見ます。それにみんなの思い出が詰まった生家を壊すことは無いと思う。義両親もそれは　望まないと思うから...」
太郎は花子の答えに涙が止まらなかった。

　移住が決定してからの勝沼家は一層明るい雰囲気になった。子供たちも大好きな祖父と祖母、また、大自然の中で遊べると胸を弾ませ、花子も初めての田舎暮らしを楽しみにしていた。その一方で太郎は、山梨で会社を立ち上げる準備をし、また、現在の自分の仕事にけりをつけなければならなかった。家族のため、そして両親のためにも寝る間を惜しんで太郎は取り組み、なんとか新規事業のスタートが見えてきた。

　移住について賛成した花子であったが、築150年を越える住宅に住むことには若干の戸惑いがあった。子供たちも小学校にあがり、子供部屋も必要となってくる。また、義両親との同居であってもプライベート空間は確保したい。大地震で倒壊しないだろうか。花子の心の中にはそんな思いがずっと続いていた。そんな時「田舎暮らしの本（宝島社」に出会い、古民家のリノベーションという方法に気づいた。「外観や骨組みにはあまり手を加えず、現在の生活に合わせた間取りを作る」これであれば義両親と太郎さんの思い出の詰まった実家を壊さずに利用できる。花子は太郎に古民家のリノベーションを提案しようと決めた。

　花子からリノベーションの提案を受けた太郎は、その話をすぐに了承し、実家の両親にも相談した。寅男は家に手を加えることに不満もありそうであったが、可愛い孫たちと同居できることが嬉しく、また、朝子の後押しもあり快諾をした。太郎は早速どのような改築が可能であるか、また、勝沼宿という歴史ある町なみの中の古民家をどのように手を加えるか考え始めた。そして思った『移住からリノベーションまで甲州市役所に相談してみよう』
これが景観調和住宅研究グループ3班と太郎との出会いであった。

第1章　太郎との出会い　終わり